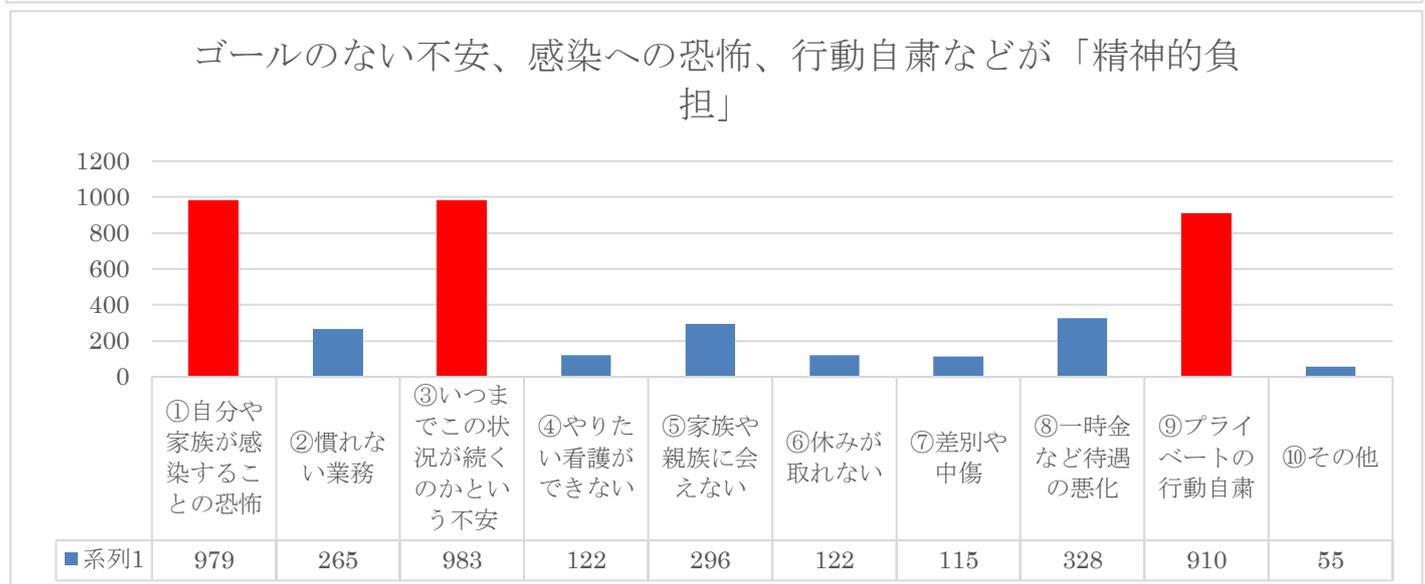
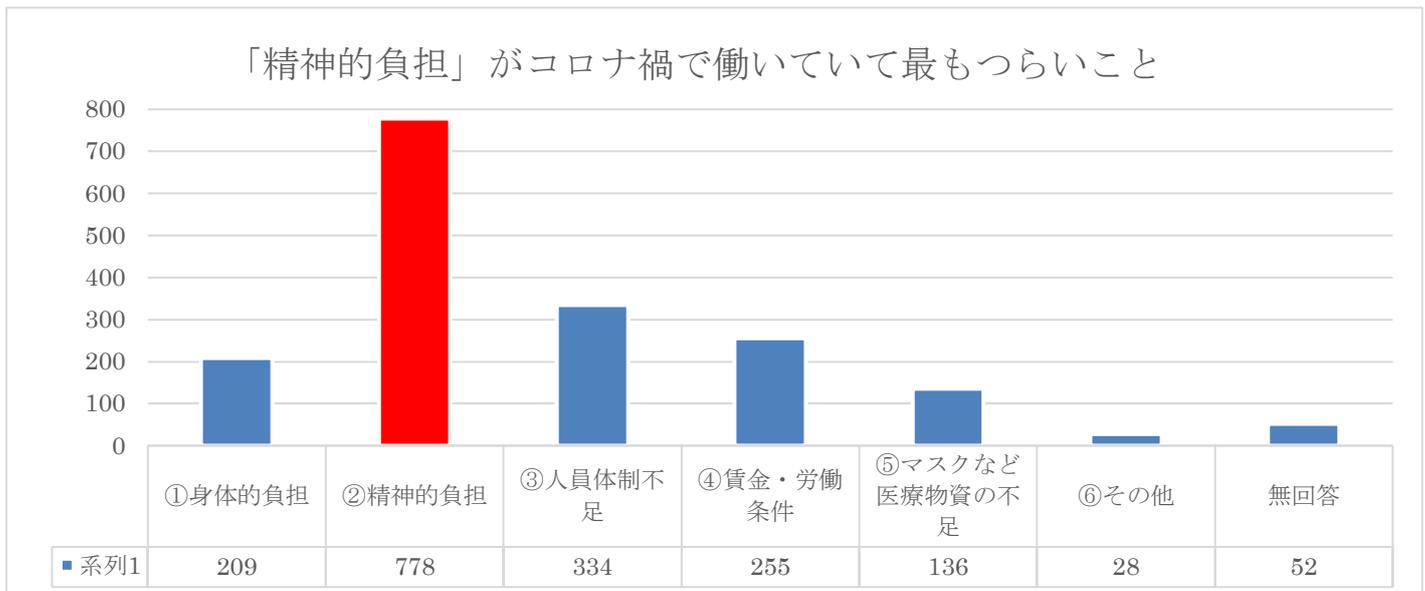


みんなの思いを届けた記者会見

3月10日、京都府政記者クラブにて記者会見を行いました。新型コロナに関わる職場の緊急アンケート(1,792人分)の結果を発表。新型コロナ禍における人員体制、精神的負担、離職、差別・偏見などの働き方の変化、政府のコロナ対策などについて聞いたアンケートです。

主なアンケート結果では、「コロナ禍で働いていて最もつらいことは？」で「精神的負担(778人・43.4%)」と最も多く、「どのようなことに『精神的負担』を感じるか？」で「いつまでこのような状況が続くのかという不安(983人・23.5%)」、「自分や家族が感染することの恐怖(979人・23.4%)」、「プライベートの行動自粛(910人・21.8%)」となっています。約半数(48.7%)が仕事を辞めたいと思いつつ働いて、退職を検討している、迷っている人は半数以上(56.3%)となっています。コロナによる差別や偏見がある、聞いたことがあるは34.0%です。政府のコロナ対策を35.0%が支持しておらず、国や自治体に「賃金・一時金の引上げ」を約半数(49.4%)の人が求めています。





参加したコロナ病棟で働く看護師からは、「多くのスタッフが身体的・精神的疲れなどから退職し、院内からの応援や派遣スタッフでぎりぎりの人数でやっています。陽性エリアでは、防護服やN95マスクの上にシールド付きマスク、ゴム手袋を二重にして帽子もかぶり、ずっと立ちっぱなしです。汗だくで、ゴーグルも曇って視野も狭くなり、心身の疲労がたまっています。高齢の患者さんには、私たちの顔もちゃんと見えず、声もマスク越しで聞こえづらく、不安を与えていると思います。ぬくもりのある本来の看護とは違い、葛藤を抱えています。それでも、自分でできることを精いっぱいやっています。第6波では、当院もクラスターが発生し、治療中の入院患者さんが、次から次へとコロナ病棟へ移って来て、定数以上に受け入れました。寝たきりの高齢者や認知症の方もいて、今まで以上に業務が増え、一日の勤務が終わると、みんなくたくたでした。保育所や小学校で子どもが濃厚接触者になり、スタッフが休むと、少ない人数でカバーし、勤務変更もあり、夜勤も増えました。病院全体が大変な思いで頑張っています。こうした中で国がつくった4000円の補助金は低すぎます。すべての医療労働者の処遇改善を望みます。」

「発熱やPCR検査の問い合わせ含め電話が常に鳴っているため電話対応として1人必要な救急外来の状況。優先度の高い人から、できるだけ早く患者さんの元に行けるようにみんな必死で働いているが人が足りない。週2回必要な清潔ケア・入浴が1回に、本来、必要なケアができなく、みんな苦しんでいる。また、高齢者の救急搬送依頼を断るケースが増え、心が痛んでいます。休憩時間はとれず、準夜の平均で28分。休校で小学生1年生を3日間、丸1日家に置いてきた。4日目は病院に連れてきた。これだけの忙しさでは、賃金と見合っていない、改善を。」



「昨年9月と今年1月に施設内でクラスターが発生した。濃厚接触者の判断も不明なまま、病欠職員の勤務変更で連日超過勤務、連日勤務せざるを得ない状態で、日に日に職員の疲労、疲弊が限界の状態。特に病欠となった職員に看護師が多く、もともと退職も集中していたため、感染者対応に最も必要である看護体制が損なわれる事態となってしまった。出勤できる看護師の超過勤務は限度を超える負担となった。職員は毎日、防護衣・N95マスク・ゴーグル・キャップ・手袋の完全防護の状態を一日中過ごし、陽性者の居室に入る際はその都度防護衣を着替える、消毒するなどの手順を何度も行い、勤務中はひと時も気の休まることがなかった。行政に医療従事者の派遣の相談を行ったが、施設内で自助努力をしてほしいとの返答のみで、なんら援助をうけられなかった。老健は医療もできるからと思われるのかわからないが、病院と比べ医療体制は脆弱なものである。人員体制の増強を国、行政レベルで底上げしてください。」

取材には、読売新聞、産経新聞、京都新聞、あかはた、京都民報、NHKの6社が参加。記者会見の内容は、同日の18:30のNHKニュースで放映されました。

大幅賃上げ、大幅増員を求めた京都府要請

同日、記者会見前に京都府要請を行いました。京都府に対して、①医療・介護労働者の大幅賃上げ、大幅増員、②感染状況に耐える保健・医療体制の構築などを求めました。コロナアンケートの結果を報告し、私たちの作成した「めざすべき看護体制（京都版）、新興・再興感染症に備えた医療体制の確保を含む」を説明し、職種を限定



するなど職場の不団結を生む、国のすすめる「ケア労働者の賃上げ」を改善し、ひっ迫している医療提供体制を早急に改善するように求めました。参加した現場の組合員からは、リアルな現場の実態を伝え、改善を強く求めました。

京都府は、現場の実態やアンケート、めざすべき看護体制を参考に京都府政に反映したいと表明しました。引き続き、改善を求め、現場の声を伝えていきたいと思ひます。

市民にアピールみんなで宣伝

10日、5ヶ所の拠点で宣伝を行いました。宣伝を行う前に「3・10みんなでつながるメディカルワーカー・ミーティング@京都」と称して、意思統一の集会を行いました。集会では、オンラインで拠点をつなぎました。日本医労連の佐々木委員長や愛知県医労連の林副委員長など全国や愛知の取り組みを紹介し、エール交換を行いました。また、民医労の各支部、北部のふるさと医療・福祉労組、第一日赤職労、桂労組など加盟組織もつながり、みんなで意思統一を行いました。その後、各拠点に移動して、宣伝。多くの市民が、署名に協力してもらいました。





第一日赤職労は昼休み集会、第二日赤労組は夕方宣伝、全JCHO京都は職場アンケート掲示、洛西NT労組は今年も腕章つけて結集



夕方はロシアのウクライナ侵攻に抗議

10日の18時から、四条河原町にて、京都共同センターをはじめ、社保協、京都総評と一緒に、ロシアのウクライナ侵攻に抗議する宣伝行動を行いました。宣伝では、18歳の青年が飛び入りでマイク握るなど、市民の反応はすごいです。12日の00:20分の朝日テレビで報道されました。勝野委員長が取材を受け、2度目のテレビ出演(^^♪

